

## 【書 評】

石井誠士著 『癒しの原理  
——ホモ・クーランスの哲学』

(人文書院・1995年・262頁)

浜 口 吉 隆

本書は、著者が1989年から1994年までに「大学紀要」等に掲載した論文また講演を編集したものである。現代の医療および生命倫理の根底にある人間の生命の問題を、「癒し」という視点から問う哲学的解明の試みである。科学的治療の対立概念として「生命そのものの癒し」に注目し、身体性を重視し「生きる根拠」を探る実存的姿勢がうかがえる。発表された年代とは別に、次のように構成されている。第一章で「ホモ・クーランス」を提唱する思想的背景に触れ、第二章の「哲学的生命論」で今日生命問題の本質を問い、第三章の「死の問題」において、現代なぜ死が問題化されるのかを探っている。第四章の「生命と技術」では臓器移植や生殖技術を例題にして科学の進歩と人間の生命および環境との根源的関わりを見直そうとしている。生命とそれを対象化する自然科学との関係の在り方を、今日注目されてきている中世のヒルデガルトの「直視の世界」から再検討するのが第五章である。そして第六章で、著者が「癒し」の根本問題を問う切っ掛けになった「学としての健康科学」の必要性を説いている。

第一章で、著者は哲学や宗教から切り離された医学が「現象の法則」を探求し、生命を対象化している現代こそ、「根本的に自己の在所」を問う生命への主体的関わりが必要であると訴えている。イエス

の「思いわずらうな」(マタ6:25-34)という宗教的生命観や自己の根底に「存在の普遍的真理」を見ようとする道元の思想を借用して、「こころとからだの一体となつたいのちに帰る」ことを求めている。またV. v. ワイツゼッカーの「主体を相互に主体たらしめる根拠への関係」、生命の相互主体的な関係のなかで人間の「痛み」の問題を解明する糸口を探る。「痛みの理由は、私たちの生の存在理由に関わる」ものであり、痛みは極めて個人的、人格的であるが、「共に痛む」という共苦の姿勢こそ愛の在り方であって、そこに癒しと至福の道が開かれてくる。「痛む人」(homo patiens)は、「共苦する人」(homo conpatiens)に触れることによって、「癒す人」(homo curans)に変容される。医療の原点と宗教の存在理由を「癒し」に見て、近代的な知の在り方に反省を促す。

第二章では、現代、なぜ生命や人間の存在が問題化されるかを問い、生氣論と機械論の伝統的生命観の不十分さを指摘し、西田幾太郎やハンス・ヨナスの哲学的生命観に基づいて、身体的存在としての生の自覚と自由な有機体的存在に注目する。有機体の根本的自由を「物質代謝」による存在様式から考察し、人間の物質への依存性と自己同一性の連続性また自立性を検証し、人間生命を不断に自己超越する存在として捉えている。生命を身

体性から見る著者は、世界・環境との関係を次のように結論する。「世界は主体がそこから生まれ、そこに生き、そこに死に行く場所である。それは包み生かすものであり、癒すものである。」「世界は、物質代謝の物質世界のみではなく、もっと、無数の個体と種が相依相関し、さらにそれらの関係を通して、無数の個体と種を産み育む環境世界を意味する。」これは環境問題を論じるときの著者の基本的視点でもある。

第三章で「死の問題」が現代の啓蒙運動の一つであり、いかに死にゆく人や自分自身の死と向き合うかが問われている。しかし著者は、その問いを単にターミナル・ケアに終始させることなく、「人間が生きて死ぬこと、よく生き、よく死ぬ」という人間存在の問題として受け止め、安楽死や技術的配慮のみでなく、死の意味を問うている。「生の否定性としての死は、人間の根源的生の可能性に、そしてまた創造的な愛の可能性に関係しているのではあるまいか。」宗教こそ、死と対話する勇気を与えるであろう。死は自然的法則でありながら、「生も死も、神の大いなる生命の秩序に基づく」という。死と結びついた限りある生が絶対的意味をもつものであり、生命の尊厳がここにある。現代は死を一つの知的興味の対象にし、客観性の方向で問題視しているが、「死は対象的なことではなく、私たちの自己の存在そのものに関わること、主体的なことである。」

第四章の「生命と技術」では(1)臓器移植と人間の問題、(2)生殖テクノロジーと助産の技術、(3)労働と環境への関係における人間、を論じ、技術や環境に対する人間の責任の自覚を促している。臓器移植は医療や倫理の問題であるばかりでな

く、人間の問題である。ヒポクラテスの“therapeia”が示す「自然治癒力への世話・奉仕」を現代の医療技術にどのように取り戻せるか。確かに、「臓器は不治の病に苦しむ人を救う貴重な資源」ではあるが、移植による延命効果があるとしても、選択の余地が医師にも患者にも残されていないなければならないし、臓器提供者本人や家族の意思を尊重すべきである。インフォームド・コンセントを前提にした患者主体の医療、権利の有無に左右されない人間の尊重、また先端技術の結果に対する責任を自覚して、自然治癒力への奉仕に努めるように。生命の根から遊離したテクノロジーは本質的に破壊的である。新しい生殖技術が人間の在り方と社会関係を根本的に変える可能性を秘めているから、技術の限界を認めつつ、種々の関係性のうちにある生命に対する畏敬の念をもって、創造としての誕生の出来事に参与しなければならない。更に、人間の労働と科学技術によって作り変えられる世界や自分たちを取り巻く環境に対して責任を自覚する必要がある。個体と環境との間にある根源的依存関係を認識し、「環境への畏敬」を新しい倫理の根本原則にするように訴えている。聖書において神が人間に委託されたのも、「環境とその中のあらゆる物に仕え、それを護るためである。」自然科学者と技術者との協同研究また学際的研究によって、「量の文明から質の文明へ」転換させる必要がある。

第五章の「直視の世界——ヒルデガルトの癒しの思想」では、生命が根本的に問われる現代にあって、自然科学としての対象知の方向ではなく、「生きているものの生きているもの自身の直観的把握」つまり「生命の直視」(visio)こそ大切で

あるという。癒しの問題と救いの問題の内的連関を神の作品としての被造物と神の言葉の「受肉」のうちに見つめる。「キリストが苦しむ者、病める者の友でいられたように」、病み苦しむ人のなかに「人となった神を見る」という永遠のものの直視に向かう。ヒルデガルトは最も優れた癒し的手段として、「改悛」(paenitentia)つまり存在の全体的根本的革新を重視する。人間は自分の癒しと救いに責任があり、病気は自らが神と他者と環境との関係を攪乱することから起こるから、その存在全体の関係性を正す必要がある。神の作品 (opus) としての人の被造性は、人間が性的に規定された存在であることと不可分である。「男も女も、それぞれ独立した人格として互いのためにあり、互いを認め、開発し合い、互いに求め、充たし合う。」今日の情報化され商品化された性と愛との分離した状況を厭う。また、人間は被造物と共にある作品であり、他の被造物と対話しながら、神の創造を完成すべき存在者、そういう意味で神の協働者である。こうして癒しと救いは世界全体の生きとし生けるものに関連しており、「被造物の苦しみは、私の苦しみである。」著者は、このような人間の自己存在の根拠への覚醒から現代の技術的向上の意義を糾明するよう促す。

最後に、著者は第六章で健康科学 (health sciences) の必要を訴える。なぜならば、疾病の治療は、直ちに健康、真の癒しを意味しないからである。近代の機械論に基づいた生物学的医学は疾患の診断と処置とで特徴づけられるが、健康科学は人間の生命の全体的調和による癒しの事実を学問の対象にするものである。厳密には「健康」は科学の対象には

ならない。身体を具えた私自身の生命を直視し、痛みを直接的に経験する「根源的主体」を問う哲学や宗教をも基盤にした健康人間学 (health anthropology) を提唱する。無限性ととの関係における有限な生と健康の意味を問う。著者によると、WHOの健康の定義は癒しと健康をよく表現している直観的定義である。そこには価値と存在とが一つである実在として、「よく生きること」「Well-being」つまり関係の本来性を生きる人間存在の根本様式が示されている。著者は癒しの事実を「死にきって生きる生」という宗教的生に見ており、生命体を貫いて超越的にして内在的なものうちにある癒し・健康こそ、人間存在の成立根源を問う宗教に連なるものであると考えている。

以上のように、本書は現在の医療や生命倫理の根底にある問題点に注目しながら、諸関係のなかにある人間生命・存在の「癒し」の必要を説いている。各章の批判的省察をするには、より専門的研究を要するので力不足であるが、私は現代医療が病気の治療 (cure) 中心から病人の看護 (care) の重視へ移行している現状を見るとき、その根底にある生命の癒し (healing) と人間の救い (salvation) との関連を研究する必要を感じていたので、著者と同感するところが多かった。本書は具体的な生命倫理の問題を解明するものではないが、人間生命の癒しや健康は医学だけでなく、生命哲学や宗教思想によって深められるべきものであることを現在注目されているヒルデガルトの「直視」を参考にして、生命を対象化する現在の科学技術の在り方に反省を促している点では大いに賛成できる。